

# 外国映画にみる東京の都市景観の特質

常 方圓<sup>1</sup>・川添 善行<sup>2</sup>・中井 祐<sup>3</sup>

<sup>1</sup>非会員 東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻

(〒135-0087 東京都文京区本郷7-31 E-mail:jo@keikan.t.u-tokyo.ac.jp)

<sup>2</sup>正会員 工博 東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻 助教

(〒135-0087 東京都文京区本郷7-31 E-mail:zoe@keikan.t.u-tokyo.ac.jp)

<sup>3</sup>正会員 工博 東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻 教授

(〒135-0087 東京都文京区本郷7-31 E-mail:yu@keikan.t.u-tokyo.ac.jp)

都市景観の魅力は、その多様な表れ方にある。本研究は、東京を舞台にした外国映画を対象とし、外国人の視点から東京の都市景観の特質を把握するものである。1940年代から2000年代までの外国映画を対象とし分析を行った。首都高速道路の出現により、新たな都市体験としてのシーケンス描写の出現したこと。同じ対象物でも年代により撮影方法が異なり、付与される意味性が変化していることなどを明らかにした。

**Key Words :** 東京、都市景観、外国映画

## 1. はじめに

ある空間的な範囲を持った村落共同体などの景観の把握と異なり、都市景観の把握はその対象が確定しにくいという点で困難である。特に東京をはじめとした大都市になればなるほど、観察者の視点により記述される都市景観のあり方は大きく異なる。しかしながら一方で、その多様な景観の表れこそが都市景観の特徴であり、都市景観の魅力であると考えられることもできよう。

その多様な都市景観の把握手法の一つとして、本論文では東京を舞台とした外国映画を取り上げる。外国映画という異なる視点からみると、日常生活者である私たちが気付かない、東京の都市景観のある特質をみることができるとは思われる。

映画に関する研究は、映画学の分野で幅広く行われている。都市景観の分野では、神谷らによる「観光ガイドブックからみた欧米 10 都市の代表的景観に関する研究」や、宮本らによる「外国人からみた日本の風景」など、ある媒体を介した都市景観研究がすでになされている。また、映画と都市に関する研究において、日本建築学会で、森らによる「東京の日常生活を描写した映画にみられる都市生活像」、Salvator-John A. Liotta の「A Critical Study on Tokyo: Between Cinema, Architecture, and Memory A Cinematic Cartography」、福島らによる「サイエンス・フィクション映画における建築・都市の空間変容」及び「20 世紀の都市における生活の場面としてのインフ

ラストラクチャー」など、多くのものが発表されてきた。しかし、外国映画における東京の都市景観の表現のされ方を取り扱った研究はない。

本研究は、東京を舞台にした外国映画のシーンを整理・分析して、東京の風景がどのように描かれているかを考察する。そして、外国映画に見られる東京の風景の「特質」を明らかにすることを目的とする。

## 2. 対象と方法

### (1) 対象選定

対象となる映画の選定においては、「世界映画大辞典」（日本図書センター、2008）、映画のストー

表-1 研究対象映画一覧

映画名	年代	国	監督
東京ジョー	1949	アメリカ	スチュアート・ヘイスラー
東京暗黒街・竹の家	1955	アメリカ	サミュエル・フラー
007は2度死ぬ	1967	イギリス	ルイス・ギルバート
惑星ソリス	1972	ソ連	アンドレイ・タルコフスキー
ザ・ヤクザ	1974	アメリカ	シドニー・ポラック
東京画	1985	西ドイツ	ヴィム・ヴェンダース
Tokyo Eyes	1998	フランス	ジャン・ピエール・リモザン
WASABI	2001	フランス	ジェラルド・クラヴジック
ロスト・イン・トランスレーション	2003	アメリカ	ソフィア・コッポラ
キルビル1	2,003	アメリカ	クエンティン・タランティーン
イントゥ・ザ・サン	2005	アメリカ	ミンク
バベル	2006	アメリカ	アレハンドロ・ゴンサレス・イニャリトウ
TOKYO!	2008	フランス	ミシェル・ゴンドリー
		フランス	レオス・カラックス
		韓国	ボン・ジュノ
ラーズン・ガール	2008	アメリカ	ロバート・アラン・アッカマン

リーや舞台、そして監督や俳優等の製作スタッフについて紹介しているものである。それに収録されているものの中から、戦後の東京をメイン舞台とした外国映画を選定する。また、「The Internet Movie Database」よりロケーション場所、製作国や上映国について調べる。より一般性を高めるため、本研究は欧米において10カ国以上上映されている作品のみについて調べる。ただし、「人」を対象にしたドキュメンタリーを除外する。その結果、表1の14本の映画を選定した。

## (2) 分析手法

対象となる映画のうち、都市景観が映しこまれている屋外空間のシーンを抽出し、タイムテーブルを作成する。次に抽出した各シーンの属性をそれぞれ「場所性」と「物語性」に分類する。

「物語性」のシーンとは、会話を中心に構成され、ストーリーを進行させるため登場人物にフォーカスされているシーンである。「場所性」のシーンとは、登場人物は登場しない、もしくは風景の一部として登場し、むしろ登場人物がおかれている状況や場所を説明するシーン、と定義する。

上記2種類のうち、本研究は外国映画に見られる都市景観の特徴について分析を行うことから、「場所性」の景観シーンのみについて分析を行う。次に、「場所性」のシーンをワンカットずつ静止画として抽出する。これらのカットを、①「風景の内容」何が撮影されているか、②「景観の種類」撮影対象がどのような分類か、③「ショット」カメラの位置、④「アングル」カメラ撮影の角度、⑤「時間帯」の項目について分類と分析を行う。

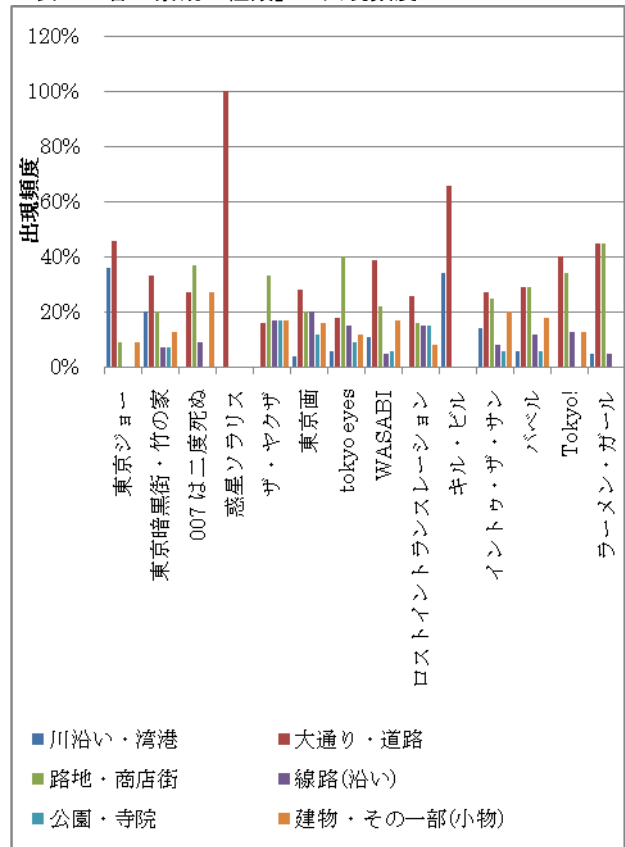
## 3. 「場所性」シーンの分類と分析

### (1) 各「景観の種類」の出現頻度

抽出した静止画のカットをそれぞれ撮影されている景観の種類ごとに、「川沿い・湾港」、「大通り・道路」、「路地・商店街」、「線路・線路沿い」、「公園・寺院」と「建物・看板」の6つの景観の種類として分類した。これらの景観の種類の出現頻度を映画毎にまとめ、年代順に整理したのが、上の表2である。

この表から、年代ごとに出現頻度が変動していることが分かる。しかし、年代を問わず、一貫して多く使われるものとして「大通り・道路」と「路地・商店街」の景観のシーンが挙げられる。

表-2 各「景観の種類」の出現頻度



### (2) 「大通り・道路」の分析

#### a) 撮影方法の特徴

戦後間もないころの映像を見ると、大通り脇の歩道で大通りの往来を眺めている、あるいはある高めの場所から大通り全体を見つめるシーンが目立っている。しかし、近年の大通りのシーンを観察すると、実際に大通りを通過して、大通りとその両側にある風景を体験することが多くなっている。前者は大通りの風景を視点が固定されている「シーン景観」として、後者は視点が移動している「シークエンス」景観として捉えていることが読み取れる。

図-1 東京ジョー(1945)

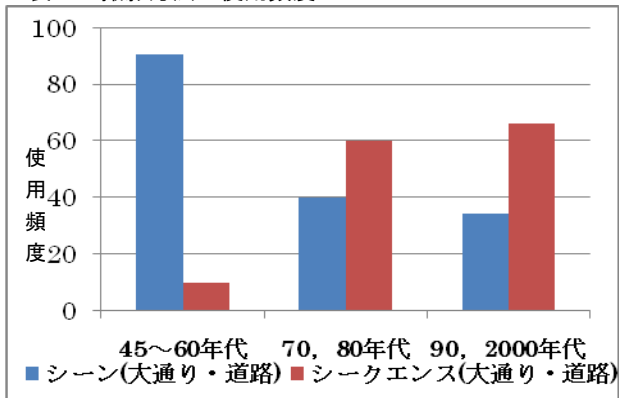


図-2 イントゥ・ザ・サン(2005)



また、「シーン景観」描写と「シークエンス景観」描写の占める割合について年代ごとに整理したのが下のグラフである。グラフから、戦後 20 年間では「シーン景観」としての描写が 90%も占めていたことが読み取れる。しかし、70年代において、撮り方が「シーン景観」主体から「シークエンス景観」に大きくシフトし、この高速移動による体験型描写が現在まで継続され、その傾向が強まっている。ちょうど撮り方が大きく変わったこの 70 年代に、首都高速道路が映画（「惑星ソラリス」1972）の中で初登場した。これが「大通り・道路」の撮り方における転換点であると考えられる。

表-3 撮影方法の使用頻度



b) 風景の内容について

首都高速道路をメインとする「シークエンス景観」としての描写内容において、時代の推移による大きな変化は見られない。下の図は、1970年代と2000年以降の映画のシーンを切り取ったものであるが、同じような風景が撮影されていた。

図-3 惑星ソラリス(1972、左)とロストイントランслーション(2003、右)の対比



図-4 惑星ソラリス(1972、左)とロストイントランслーション(2003、右)の対比



ここで注目すべきは、従来首都高速道路が撮影されるシーンが車上からの移動景観として把握していたのに対して、2000年代後半には首都高速道路における高速移動体験のみでなく、それを背景とした周辺の人間の地上のアクティビティも表現されるようになったことである。下図を見ると、首都高速道路自体が風景となり、「シーン景観」として再び描写されるようになった。首都高速という同じ撮影対象であっても、その撮影方法や意味性は大きく異なっているのである。

図-5 バベル(2006、上)とラーメンガール(2008、下)



c) 「大通り・道路」の考察

まず、首都高の登場を境に、新しい都市体験としての高速移動シークエンス描写が生まれた。次に、高速移動シークエンスの体験型描写が現在まで継続され、その傾向が強まっている。そして、近年において、人の地上のアクティビティに視点が戻るといふシーン描写への回帰が見られるようになった。

(2) 「路地・商店街」の分析

a) 撮影方法の特徴

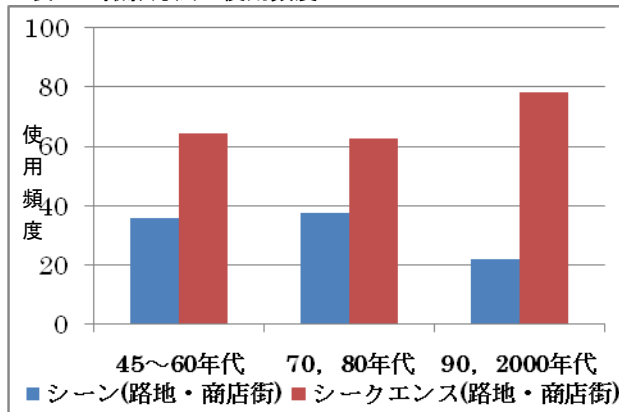
「路地・商店街」のシーンでは、「大通り・道路」と違って、40年代から最近の映画まで、視点が移動する「シークエンス景観」として描写されている。その移動速度はほぼ人間の徒歩速度に合わせている。

図-6 東京ジョー(1949、上)とTokyo eyes(1998、下)



また、表4は「シーン景観」描写と「シークエンス景観」描写の占める割合について年代ごとに整理したものである。時代を通して、路地・商店街においてシークエンス描写が用いられ、近年増えつつあることが分かる。

表-4 撮影方法の使用頻度



b) 風景の内容について

戦後間もない40～50年代に撮影された映画では、商店街は昼のシーンが殆どである。その時期の商店街も今と変わらず看板や標識が多く出ているが、まだネオンが導入されていなかったため、夜の風景ではなく、昼の賑いが捉えられている。60年代後半と70年代前半の高度経済成長期において、ネオンが街に大量進出し、路地の看板が特徴的風景に変化した。ちょうど同時期から、撮影対象として夜間の路地が多く取り上げられ、人やネオンが互いに賑やかさを競い合うかのようなシーンが多く見られるようになる。しかし、80～90年代になると、ネオンや看板の多さは以前のままであるが、あえて人のいないネオンだけが光る商店街の光景が撮影されるようになる。その傾向はその後も続き、2000年以降も「路地・商店街」のシーンから人影は姿を消している。

図-7 東京ジョー(1949、左)と007は2度死ぬ(1966、右)



図-8 東京画(1985、左)とTOKYO!(2008、右)



c) 「路地・商店街」の考察

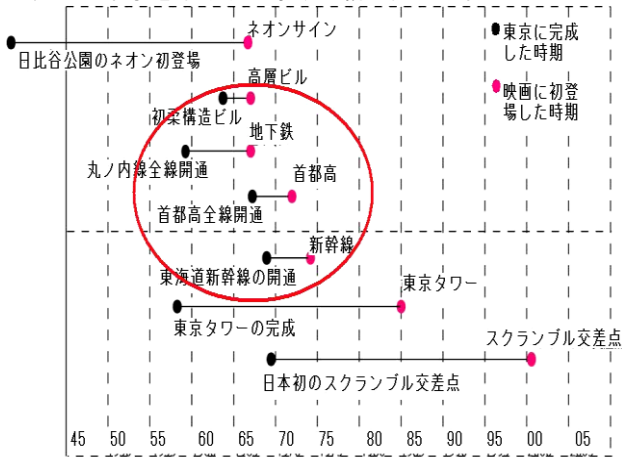
近年において、あたかも映画の知っている本人が体験しているかのように、シークエンス景観として描かれる傾向が路地においても見られる。シーンにおいて、従来は「路地・商店街」の猥雑な界索性が目立っていたが、近年では都市生活者の孤独感などに重点がおかれて描写される傾向がある。

(3) 東京を象徴する景観の構成要素

繰り返し映画に登場する景観要素、及び東京として認識しやすい景観要素を取り出し、東京を象徴する景観の構成要素とする。これらが東京に完成してから、映画に初めて取り上げられるまでの時間を整理したのが上図である。これによると、首都高、新幹線、地下鉄、及び高層ビルなどは完成してから映画に登場するまでのタイムラグが短く、特徴的な景観要素として把握されやすいことが分かる。その多くがインフラストラクチャーである。これは首都高速道路のようなインフラストラクチャーは新しい都市体験としてのシークエンス景観を誕生させたこと

によるとも考えられる。

表-5 東京を象徴する景観の構成要素の初出現年



#### 4. まとめ

東京を舞台にした外国映画のシーンを整理・分析して、東京の風景がどのように描かれているかを考察した。その結果、「大通り・道路」と「路地・商店街」の景観シーンは時代を通して、出現頻度が高いことが分かった。

「大通り・道路」の景観シーンにおいて、撮影方法に大きな変化が生じた。60年代まで、「シーン景観」として描写されることが多かったが、首都高速道路の登場を境に、新しい道路景観の描写として、高速移動シークエンス描写が誕生した。この道路景観の描写方法は、現在まで継続され、使用される頻度が徐々に増加している。しかし、近年において、人の地上のアクティビティに視点が戻るという「シーン景観」描写への回帰が再び見られるようになった。

また、「路地・商店街」の景観シーンにおいて、撮影方法は一貫している。40年代から最近の映画まで、映画を見ている観客自身がまちを体験できる「シークエンス景観」としての描写が主流である。しかし、景観シーンに映る風景の内容が大きく変化した。以前は賑いの風景が多かったが、現在では故意に人の姿を消して撮影しているシーンが多い。「路地・商店街」空間において、昔はその限界性が注目されていた。近年では孤独感などの心理的背景として見られる傾向がある。

景観の構成要素について、首都高、新幹線、地下鉄、高層ビルが景観の構成要素としてインパクトがあり、完成してから映画に登場するまでのタイムラグが短い。これらの多くがインフラストラクチャーである。したがって、首都高速道路のようなインフラストラクチャーは新しい都市体験としてのシークエンス景観を誕生させたことによるとも考えられる。

#### 参考文献

- 1) 福井邦宜, 神谷文子: 観光ガイドブックからみた欧米10都市の代表的景観に関する研究, 日本建築学会, 1998.
- 2) 宮本大輔: 外国人からみた日本の風景, 東京大学土木工学科卒業論文, 2004.
- 3) 森亮人, 奥山信一, 塩崎太伸: 東京の日常生活を描写した映画にみられる都市生活像, 日本建築学会, 2006.
- 4) Salvator-John A. Liotta: A Critical Study on Tokyo: Between Cinema, Architecture, and Memory A Cinematic Cartography, 日本建築学会, 2007.
- 5) 福島麻友子, 北川啓介: サイエンス・フィクション映画における建築・都市の空間変容, 日本建築学会, 2007.
- 6) 福島麻友子, 北川啓介: 20世紀の都市における生活の場面としてのインフラストラクチャー, 日本建築学会, 2006.
- 7) 夏目欣昇: チャールズ・チャップリンの映画作品における都市と建築空間, 日本建築学会, 2007.
- 8) 高村倉太郎, 岩本憲児, 佐崎順昭, 宮澤誠一, 奥村賢: 世界映画大事典, 日本図書センター, 2008.